

第二章 九州及び關東作戦

第一節 米軍攻撃計畫に関する判断（附圖参照）

第一章第十一項記述の様に米軍の本土に對する戰略判断を先づ九州方面次で關東地方を攻撃するものとの判断に基いて米軍の本土攻撃要領を次の様に判断した。

一、米海空軍攻撃の様相

米軍の本土上陸攻撃は何れの場合に於ても先づ米海空軍の全力を以て米艦船を狙ふ本土の我が航空基地の破壊、封殺作戦を以て初まり次で此作戦に併行して交通特に日本全土の鐵道、本土島嶼間の海峽瀬戸内海の海上交通破壊、遮断が相當期間に亘つて猛烈に反覆せられ九州、四國、本州、北海道を夫々完全に孤立せしむる丈て無く是等の島嶼の内部に於ても寸断的に孤立状態に陥れ日本軍の兵力機動軍需品の輸送を便塞することを策するであろう。此間國民の戦意を喪失せしむる爲の各種の宣傳を執行的に試みるであろう。上陸作戦の

直前には以上の作戦に併行して更に上陸正面の廣地域に亘つて最も激しい海空軍の戰術的破壊攻撃を加へる其の目標は沿岸地域一切の軍事施設と日本軍の決戦正面に對する兵力、軍需品の戰場機動を封殺するための鐵道、陸路、渡河點通信施設の破壊、軍需品の焼夷、沿岸住民を恐怖に陥れる爲の砲撃が豫想された。以上の作戦は上陸前一ヶ月以上繼續せられ其の規模や結果は一九四四年の「ノルマンデイ」上陸作戦の實情に悉かに倣すべきことを豫想した。此の攻撃に任ずる米海軍の根據地は「ウルシー」又は「レイテ」灣を使用し一部は「マニラ」沖をもち用するものと判断した。基地航空部隊の基地は「マーシャル」沖、硫黄島及び今後推進される基地と豫想した。其の豫想の成果を信じて之を護衛する艦隊とが沖繩、比島本土攻撃地上軍を輸送する船団と之を護衛する艦隊とが沖繩、比島其他中部太平洋の基地を出發し本土に向ふ、上陸作戦は海空軍の最高潮に達する此の戰術的兩艦隊に切して開始されるものと判断し

た。米上陸軍攻撃計畫の地域判断は次の通りであつた。

九州及四國に對する攻撃の判断
九州及四國に對する米軍攻撃の目的は關東地方攻撃のため航空及び艦船の大攻撃基地を獲得し關東地方に對する最終決戦を準備する外に本土全域の完全なる燃焼破壊、朝鮮と本土及本土内の交通完全遮断を遂行し本州各地區特に關東地方を完全に孤立癱瘓せしむるに在りと考察した。又此作戦の成功に及び關東決戦の遂行を俟たずに日本の屈服を所期し得る場合も計算に加へて居ることを豫想した。此の作戦目的より考察すれば九州及四國に對する地域的作戦規模は必ずしも其の全域の攻略を企圖せたいであらうそして此の目的に最も好く合致し而も沖繩基地を獲得しある米軍に取つては作戦が最も容易で日本軍としては本土の短末に在る爲兵力集中が困難な南部九州（宮崎縣及び鹿兒島縣）を攻撃する算が最も多いとして苟も強力なる日本陸軍の健在する本土の一角を攻撃する以上米軍の作戦規模

は極めて強大なることか豫想される。四國は基地としての價値は尠いが南部九州に作戦する場合日本軍特攻機の側面攻撃を封殺し又日本軍を孤島に拘束する意味に於て相關聯して作戦する必要がある更に土佐平地の飛行場を占據すれば本州の大部を戦闘機を以て制壓し得る而も四國は孤島（我々は「レイテ」島と同様だと云つてみた）であるばかりでなく以上の目的のため必要地域たる土佐平地は孤立平地で少数兵力を以て攻略出来る、以上の見地に基いて此の平地を南部九州と相關聯して其の前後か或は併行して攻撃するであらう。南部九州の攻撃は宮崎平地、有明灣方面と薩摩半島西海岸との三方面が豫想せられる。何れも大航空基地を有して居る。艦船基地の見地から云ふと有明灣方面が最も好く南部九州の戦略中樞地區を成して居る都て平地への突進も迅速容易であるから主力を以て此正面に又有力なる一部を以て宮崎平地及び薩摩半島西海岸に上陸するであらう。三正面上陸の時機的順序は結論に至らなかつたが六月頃甌島

に對する米機の活動は沖繩作戰に於ける慶良間列島の攻略と照察し
 注目を惹いた。第十六方面軍は一九四五年五月頃迄米軍主力の上陸
 方面を宮崎平地と相も斷定的に考へて居たが其の判斷は修正せられ
 た。以上の作戰を容易ならしむる爲種々島を戦闘機の基地として取
 略することが多く其の時機は七月頃と判斷した。南部九州に對する
 米軍の攻撃は一九四五年五月頃迄は七月以降隨時生起する算あるを
 豫期して居たが沖繩作戰に於て日本軍長期の奮闘に因り米軍に相當
 大きな損害を與へたことや本土攻略の爲には絶對確信のある戦力を
 太平洋に集中する必要と更に爆撃成果を徹底したる後上陸する事と
 を考慮し其の時機は十月以降に遅延するものと考察した。而も上陸
 の前後と判斷せられる。米空軍の爆撃が未だ開始されない事が此の
 判斷を強めた。當時米空軍の活動の重點は西日本に移行し四國、九
 州沿岸偵察行動が活潑となつたので米軍の九州、四國方面來攻を益
 々確信するに至つた。

米軍が南部九州作戰に使用する兵力を十月頃に於ては十二乃至十五
 個師團に達するものと判斷した。尙此の作戰には、**知覽、虜虜、攻は**
 新田原等の飛行基地に米空輸兵團の作戰を併行することを豫期した
 北九州方面の攻略は一舉に西日本の死命を制し又海空基地をも獲得
 出来るが關東作戰の見地からすると基地の價値は南部九州に劣る外
 濟州島、五島、對島、壹岐等近海諸島との關係上作戰が著く複雑且
 困難となる爲此方面に攻撃して來る算は比較的尠く攻撃して來る場
 合に於ても其の時機は遅れるであらう其の際に選ばれる上陸正面は
 福岡沿岸か博多灣正面と判斷した。

三、關東方面に對する攻撃の判斷

關東攻撃は日本の心臓部である關東地方特に東京地區を廣く攻略し
 て日本の死命を制し戦争の終息をもたらす目的を以て行はれること
 は論を俟たない。關東地方攻略後猶日本の抵抗が續くことがあつて
 もそれは掃蕩的作戰と見做すであらう。而して此の作戰に當つては

米軍の日本軍に本土陸軍主力の最も強大なる必死の反撃を豫期するであらう。米軍は此の日本軍の大決戦に必勝を確信し得る戦力と作戦規模とを以て周到なる準備の下に攻撃して来るであらう。本作戰に先んじて先づ九州の要域を攻略し或は此方面に對する攻撃時機が一九四六年春以降となるへし等の判断は凡て此の考察に基くものである。使用兵力は二〇個師團を突破するものと検討した。

次で此の判断を基礎として米軍の關東攻撃の作戦要領を考察して見ると空海戦力の威力を徹底的に集中發揮し得る外上陸に適し米軍の目指す東京地區への突進が容易である相模灣或は九十九里濱正面に主力の攻撃を指向するであらう。何れの正面に主攻撃を指向する場合に於ても兩正面相輔して攻撃を併行するであらう。又此の兩正面の作戦を連接し而も關東作戦推進の基地を得る爲に一部を以て東京灣兩側地區に沿ひ進撃するとも考慮された。而も迅速に穿貫的に作戦を遂行する爲厚木或は千葉地方に對し有力なる空輸兵團の作戦を

併行する算が極めて多いと判断した。關東地方攻撃のため上陸を豫想せらるゝこの一正面は鹿島灘沿岸である。此正面は霞ヶ浦地區の錯綜した湖沼地帯や筑波山系と利根川の障礙に遮られ又距離的にも東京への進撃には適しないが他の二正面より東京に進撃する主力の作戦を容易にし且北部關東平地の制扼する目的を以て有力なる一部を以て上陸を併行することが豫想された。

以上の作戦に先んじて太島、伊豆半島、房總半島の南端を占據することも考慮に入れた。

四 其の他の方面に對する作戦の顧慮

1. 日本々州分断作戦

近畿方面に對する大規模の攻撃は其の算は尠いが四國方面に對する作戦と關聯して一部を以て和歌山沿岸に上陸することはあり得ると判断した。

又米軍が日本々士の漸進攻略を企圖する場合には伊勢灣、紀淡海

峽方面から相當大規模なる攻撃を加へ一部の兵力を以て日本海、
賀灣方面より策應せしめ本州を鈴鹿山系に於て分斷し京阪神、名
古屋等の要域を攻略する作戦を行ふことは絶無とは云へない
若し此の作戦を実施する場合は時期は相當遅延するものと判断し
た。

2. 津輕海峽制扼作戦

東北地方に對する攻撃は政戦兩略上の見地から陽動作戦等の特殊
作戦の外先づ其の算が尠いと判断した。若し一部を以て攻撃する
場合には津輕海峽を制し同方面の海空基地を獲得する目的を以て
津輕半島南部の八戸平地に來攻し青森地方の攻略を企圖するであ
らうと判断した。

第二節 九州防衛作戦

(一) 一九四五年五月頃迄の九州方面作戦準備の状況

當時に於ける九州地方の作戦準備は漸く其の緒に就いた許りで米軍を邀撃する決戦の構へは殆んど出来て居なかつたと云つても過言ではなかつた。航空、及海上作戦準備は特に遅れて居た。又一般官民も戦局の真相を知らないのと政府及大本營の報道を過信し沖繩作戦に於て戦勢を挽回し得るか如き希望を抱いて居たので官民の九州決戦の自覺と抗戦の指導、組織は見るべきものが無かつた。福岡市の豫な大都市の防空疎開さへも着手されて居ない始末であつた。

(1) 地上戦備の概況 (附圖参照)

南部九州方面では宮崎沿岸に^{156D}、都筑南方有明灣正面に^{86D}と^{98B₈}薩摩半島に^{146D}か夫々配置せられそれ等の兵團は編成未完裝備の一部は如の儘配備地に到着中で幹部や幕僚が現地に先行して陣地と宿營施設の偵察に奔走中であつた。唯有明灣正面の^{86D}丈は一四四

年秋以來現地に進出して作戦準備を進めて居たので計量の^{50%}程度は進捗して居た。

北九州地区では小倉・福岡の沿岸地区に^{145D}か配置せられ作戦準備に着手したばかりであつた。人員の未充足、裝備の不足は南部九州の諸兵團と同様であつた。滿洲より轉用せられた^{25D}は^{16HA}の直轄兵と^{16HA}として主力は九州に上陸を終つて霧島山北側地区に前進中であつた。滿洲より第一線軍へ轉用途中一時^{16HA}司令官の指揮下に入れた^{57L}は猶輸送の途中に在つて北部九州に集結を豫定して居た。北部官給平^{156L}に併立配備豫定の^{154L}は大阪から鐵道輸送中で裝備の重要部分^{154L}を缺如して居た。

南部九州の諸兵團を統率し作戦準備及作戦に當るべき^{57A}司令部は漸く財部(一部は西村)に司令部を開設し指揮を開始したばかりであつた。北部九州の作戦を擔當する豫定の^{56A}司令部は未だ編成されて居なかつた。

1945年8月完成豫定

四國九州方面地上兵力配備要圖



其の他壹岐、對馬、下の關、豐後、長崎の各要塞は日露戰爭當時の舊式暴露砲臺を主としたもので戦備は未完であつた。五島列島には^{107B}を配置し其の編成充足中であつた。

佐世保鎮守府地區の防備は防空戦備は相當見るべきものがあつたが陸戦準備は未だ研究計畫中の域に在つた。其の工廠は海上特攻用の舟艇、陸戦兵器の製作が漸く軌道に乗りつつあつた。防空兵力として小倉地區に高射砲集團の主力を配置して居た。

是等の兵團の素質は滿洲より轉用したもの或は^{86D}、特科部隊等の外は將兵の素質が良好でなく兵團司令部の指揮能力も低く戦略兵團としての戦力特に裝備、訓練團結、指揮能力を概成するには猶二、三ヶ月を要する状態であつた。陣地は一九四四年夏以來、久留米、熊本留守師團の兵力を以て宮崎平地、大隅、薩摩半島の各要域沿岸に應急陣地の構築に努め其の一部進捗しつつあつたものを前記各兵團が繼承したのである。(第一節附表参照)然し米

軍の攻撃に對する作戦計畫、兵力配備戦法等を決定することなく構築した關係上改修を要するものが多く中には役に立たないものもあつた。

上陸軍に對する戦法は本章第二項に後述する如く未だ確立徹底して居なかつた。

一九四五年三月大本營が示した本土決戦計畫も新設の軍司令部や各師團の部隊に普及して居なかつた。

兵站の準備は捷號作戦準備の際一部實施せられたものの外殆んど著手されて居なかつた。

(2) 航空及海上作戦準備

九州方面航空並海上作戦に任ずる海軍總隊、聯合艦隊及第五航空艦隊、第六航空軍は全力を擧げて沖繩方面の作戦を遂行中であつたし、又海軍は假令本土の作戦準備に支障を來しても沖繩作戦を完遂する意氣込みを以て航空戦力を投入して居た關係上航空及海

上作戦準備は海軍、航空本部、各鎮守府、警備府と陸軍の航空總軍司令部の實施せる兵器資材の整備、後方諸施設、訓練の若干が進捗しつつある外研究計畫の域を出て居なかつた。海上作戦準備も特攻舟艇の製作が漸く軌道に乗り之が配備、運用に關し現地陸海軍部隊間に協議しつつある状況に在つた。一般に地上作戦準備に比し更に遅れて居た。従つて七、八月の候は日本軍に取つて陸海空軍共に作戦準備上最も憂慮すべき危機であつた。

南西諸島方面の作戦と本土作戦準備との關係に關しては陸海軍間に作戦計畫の大綱（第三節既述）を定め其の根本思想は形式的には一應一致して居たが其の後の推移の上に兩者の見解特に兩作戦に對する戦力と努力の時機的量的配分に於て若干の差違があつた。即ち陸軍は本土作戦を、海軍は先づ沖繩作戦を重視する傾向を示した。陸軍は本土決戦の必至と必成とを期し一月以來航空戦力を除く本土及周邊要域陸軍全戦力を本土の作戦準備に集注し又國家

の總力を此の作戦準備を目標に結集發揮する施策を主導した。海軍に於ては其の必要は之を認むるも近く生起すべき沖繩作戦を地理的にも亦時機的にも戦勢挽回の最好の機會なりと信じ先づ此の作戦に最善を盡すべきであるとの考へを持つて居た。三月廿日附命令に依り下令された作戦計畫（第一章第四節既述）に於ても此の決意を明かにした。特に米軍の沖繩來攻確定せる三月二十七日聯合艦隊司令長官は軍令部總長より「天號（沖繩）作戦は皇國の存亡を賭したる大決戦なり奮闘すべし」との聖旨の傳達を拜し次で四月七日更に海軍省次官、軍令部次長より「天皇陛下には戦勝御祈願の爲、高松宮殿下を伊勢大廟に御代拜として差遣はる」旨の通電を接手し聖慮の程を拜察し益々沖繩作戦に全力を傾注する決心を鞏固にした。之が爲一月策定した陸海軍作戦計畫大綱に基く本土の作戦準備に支障を來すも敢て辭せざる意向さへ有し遂に戦艦大和の特攻出撃となつた事は第一章第六節既述の通りである。

斯の如き思考の相違を生じたのは陸軍は本土に軍の主力を、し而も既に制海、制空權米軍の手に歸しある本情勢に於ては沖繩の如き離島に於て國家の運命を決する陸軍全力を傾けての最終決戦を遂行し得ない境地に對し海軍は既に海上部隊の主体を失ひ雜存航空戦力に依存し洋上撃敵の本來の使命を遂行せざるべからざる境地に在つた必然の歸結とも云ふべきものであつた。尙陸海兩軍の特性に基因する戦略戰術思想の本質的、傳統的相違が當時に於ける陸海兩軍の立つ境地の差異と相俟つて此の關係を助長したことも心察し得る所である。

右の如く海軍は先づ沖繩作戰に全力を傾注する決意の下に聯合艦隊は之に専心したか軍令部に於ては本土作戰に關する研究をも進め三月十八日、十九日の兩日に亘り各艦隊及鎮守府の參謀長を召集し本土防衛作戰準備に關する説明を行ひ沖繩作戰に併行して實施し得る本土作戰準備即ち本土鎮守府管區の陸戰並海上特攻作戰

準備等に關しては陸軍と協力して研究準備を進めた。六月末沖繩作戰終焉と共に聯合艦隊司令長官は七月六日本土作戰に備ふる爲米機動艦隊に對する航空戦力の温存を命じ、茲に全軍一致して本土特に九州方面の作戰準備に全力を傾倒する運びとなつた。

五月頃於ける航空本土作戰に關する兵器、資材、訓練、基地等の諸準備進捗状況は次の通であつた。

(A) 資材、燃彈の準備

陸海軍共特攻機の整備を重點とし生産機は勿論、概成機も改修する計畫を立て陸軍に於ては先づ八〇〇機の改修を企圖した。陸海軍共要修理機、老衰機等の應急修理や新機体と修理發動機との編合等の措置を講じ陸軍は六月末迄に二〇〇〇機、海軍は八月中旬迄に五〇〇〇機の整備を目途として特攻整備を急いだ。尙海軍は九月末迄に特殊機約四五〇機の生産実績を得る見込みであつた。

燃料は陸軍は本土決戦の爲四万軒、海軍は三万軒を夫々配置する計畫の下に防空作戦と訓練の消費を極度に制限し代用燃料の増産を急いだ。

爆弾の特攻裝備用改修を急ぎ進め順調に進捗する見込であつた。燃弾の集積は六月以降本格的に實施する豫定であつた。

田 教育訓練

特攻隊訓練に徹底し陸軍は七八〇〇名の操縦者の教育を企圖し七月迄に一八〇〇名の操縦要員を完成し九月末迄に概ね作戦に支障なき程度に遂行し得るものと豫期されたが損耗の補充は至難を豫想された。海軍は五月中旬特攻隊の訓練を概成し練習機の特攻機改修を實施したる後第十航空艦隊の半部を以て訓練を再開する豫定であつた。何れも燃料の不足と飛行機の補給難と空襲に伴ふ時間の制限等に妨げられ其の實施は意の如く進捗しなかつた爲練度の向上を期待し得なかつた。

イ 基地の施設

米空軍の爆撃が激化するに伴ひ分散秘匿と重要施設の地下移轉を實行する外四月以降は秘匿飛行場（發進基地）を整備する主義に轉換した。

本土に於ける是等の基地は新設中のものを含み陸軍は一二二、海軍は一四九に達した。其の内秘匿飛行場は陸軍四〇、海軍五五に達した。尚海軍は別に特殊機のため若干の基地を整備した。

右飛行基地の主力は關東次て九州に在つた

ロ 本土決戦方式確立の経緯

本土上陸米軍に對する作戦並戰闘の方式は當初「サイパン」以來反覆された孤島の教訓に深刻に影響された對米戰闘法三原則であつた。即ち米艦隊の艦砲射撃の有効射程外に、海岸より離隔した陣地を選び其の威力圏外に於て戰闘すること。米軍の砲爆撃に對しては

洞窟陣地を設け其の威力發揮困難なる地帯を選んで戦闘すること。米軍火焰戰車の攻撃に對しては其の登攀、肉迫を許さない制高位置に陣地を設けることであつた。此の思想は一九四五年五月頃に至る迄本土作戦兵力の不足や訓練の未熟等と相俟て各級指揮官を支配した。其の結果作戦計畫は大本營や上級司令部の意圖に反し攻勢的形に乏しいものが多かつた。即ち米軍の上陸開始後其の主力を判定したる後決戦方面を決定し何れの方面にも進出し得る如く後方に集結せる決戦兵團を決戦方面に機動し展開し次で攻勢を採らんとする中央準備陣地の思想が多かつた。沿岸に配備せる兵團は海岸の平地を以て後方の山岳地帯等に死角の多い射界の減少を山岳の洞窟陣地を孤立守守するものが多く主動的に米軍行動の自由を拘束し攻勢せんとするものが少かつた。斯くて亦陸若くは沿岸要地の平地地帯は侮蔑せられ輕易な進襲、登陸或は海軍部隊の活動に委せらるる傾向に在つた。決戦兵團は各方面の海岸から略々等距離を測つて其の集

結位置を選んだ爲海岸から長距離離れた地域に位置した。攻勢の方式は堅固な洞窟陣地に對する徹底した統一攻勢方式に採らんとする傾向に在つた。

一九四五四月下旬組織改編せらるるや大本營及第一第二總司令部の當局者に於て此の作戦方式に對する非難が高まつた。其の論議として(1)本土決戦は國軍最終の決戦たること(2)米軍の上陸を豫想する沿岸地域に國兵の大部が居住する政治、經濟、交通の要地たること(3)本土攻勢の關係上重要統制要地の大部は長等の沿岸地區に施設し取りて一旦之を米軍の手に委する時は爾後の作戦が極めて不利なること(4)陣地の(5)火力と装甲と工事設備の絶對優勢なる米軍の確立したる優勢に對し貧弱なる日本軍の火力と突撃裝備を以ては突撃に確實なきこと(6)状況に依り決戦方面を決定せんとする思想は強制的に一線首肯せられるが作戦指導の不徹底と對峙の幾時と攻勢の變化を起す虞が大であること(7)水陸の決戦は米軍の火力優勢

困難にして而も我が陸海空戦力の統合發揮可能なる唯一の地域たる
こと等が指摘された。
従來の三原則主張の根據を成した水際における砲撃と火焔戦車に
因る瞬間的戦力消耗の不利は水際築城方式及び攻撃築城の研究徹底
と沿岸配備部隊の果敢なる戦闘に依り彼我戦線を混戦状態に導き米
軍の砲撃と戦車の威力發揮を困難ならしむる事等に依り緩和すべ
き事が強調された。又偽陣地や偽裝偽火器に依る米軍の火力吸收と
分散とが推奨された。

以上の経緯を経て六月大平營は全軍に對し本土決戦の方式は攻勢作戦にして決戦地域は沿岸特に水際地域たることを明かにし其の作戰指導は上陸米軍が未だ喬頭堡を構成せざる以前に縦深部署を以て其の上陸未完の弱點を靱強に強襲すべきことを訓令した。

尙決戦正面と持久正面の區分に關しても若干の論議があつた。即ち國土特に本土は寸土と雖も米軍の自由なる蹂躪に委すべきではない尙も米軍が上陸し來らば其の兵力の大小地域の何れを問はず決戦を断行して米軍を撃攘すべきであるとの意見があつた。然し乍ら制海制空權を失ひ機動の自由を持たない而も兵力と準備の不十分なる日本軍が斯る念願を實現することは所詮不可能であつた。従つて作戰準備特に兵備の進捗と米軍の豫想上陸正面の判断とを勘案して我が兵力運用可能なる方面を決戦正面として選り其の他の正面は持久正面として忍び成し得る限り積極果敢なる戦闘指導を實施する意見に落ち着いた。

斯かる経緯の後本土決戦の一般方式は概ね次の様な構想に基いて計畫、指導された。

日本軍の攻撃は先づ上陸準備の爆撃のため本土に近接する米機動艦隊に對する海軍航空精銳部隊及潜水艦の攻撃に初まる。

是に前後して米上陸軍船團が本土の距岸三〇〇軒内外に接近した頃から陸海全航空部隊及此海域に配備された中小型潜水艦が此の輸送船團に對し猛然特攻を開始する。

此の攻撃に呼應して沿岸に集中伏撃した特攻舟艇も其の主力を以て米輸送船團を泊地進入の前後に攻撃する。海岸洞窟陣地に秘匿せられた長射程砲も泊地米輸送船に對し砲撃を實施する。此米輸送船に對する攻撃は米輸送船團の泊地進入前後に於て最高潮に達する。此攻撃間航空部隊や潜水艦の一部を以て米機動艦隊や支援砲撃に任ずる艦隊及補給に任ずる輸送船に對し攻撃し特攻舟艇の中の蛟龍、人間魚雷の一部を之に協力させる。

米上陸軍が輸送船團から上陸舟艇に移乗して海岸に突入を開始すると此の舟艇に對し水際陣地や海岸洞窟砲臺や後方陣地の全砲兵が鐵槌的火力を浴びせる。晨洋等の特攻舟艇が此攻撃に参加する以上の攻撃に依つて米上陸軍に與へ得る損害を20乃至30%と豫期された。

米上陸軍が海岸に達着し進撃を開始すると上陸點に全火器の火力を集中すると共に沿岸陣地の諸部隊が神出鬼没の反撃を執拗に反覆して米軍の橋頭堡攻撃を阻止し彼我の戦線を混戦状態に導いて米軍の爆撃と艦砲射撃とを困難なる状態にする一方決戦兵團は米軍の上陸方面が豫想し得る状況を認めると直ちに數條の準備せる道路を利用して豫定の主決戦方面に急進し集中し主攻勢正面の攻撃陣地に展開する。攻撃を迅速に開始する爲主決戦方面及其方面の主攻勢正面を豫め概定し戦車、重砲、決戦兵團の砲兵等を先遣して展開を完了せしめ又全決戦兵團の集中を待つことなく攻撃を開始する

此方式に依り米軍の上陸開始後南九州に於ては一週間以内に短縮し攻撃を開始する(關東地方に於ては三、四日に短縮した)主力の攻撃は沿岸配備兵團が米上陸軍と沿岸に於て紛戦中の好機に乘じ攻撃を敢行する。此の攻撃兵團は縦長の大なる部署を以て豫め準備せる攻撃桑城をつたつて海岸に近迫し攻撃する。遅れて到着した第二線兵團は主攻勢正面の第二線兵團として使用するか或は他方面に使用する。

(註) 此の水際撃滅の攻撃方式に於ても攻撃開始迄に數日を経過する爲或程度轉成されつゝある橋頭堡の攻撃を免れ得ないこと及び米軍が上陸第一日より戦車、砲兵を含む大部隊の揚搭能力を有して居る之に對し日本軍の火力裝備特に對戦車火力裝備の劣勢と突撃資材の貧困とを以て果して神速なる突破に成功し得るか否か多大の懸念があつた。更に懸念された事は米軍の神速自在なる後續戦力の増勢に對抗して米軍の砲爆撃下

に於て日本軍が縦長戦力を適時戦線に加入し得るか否か又米軍が數方面より併行上陸する場合非決戦方面の持久作戦が決戦方面の作戦成功する迄培養得而も此方面へ新なる兵力の轉用機動が戦機に投じて遂行し得るか否かの點に在つた。

關東方面地上兵力配備要圖



12HA

九州方面作戰計畫要圖



備 考

D	師 団
B	旅 団
TKB	戦車旅団
---	} 作戰地境

⚡	陸地
⊙	大断天田
○	決戦兵団・移動兵団
○	地方面訓練増援兵団

